

昭和二十七年八月一日創刊
平成十七年八月一日創刊
第972号(毎月一回一冊發行)

京鹿子



8月号

彦根城
丸山佳子

城はるかさざ波街道青田風

来るものはこばまぬ城下松の芯

盛り砂に城の白鳥抱卵中

万緑に時間長者の亀五匹





汗しづむ伊井大老の歌碑拝し
伊井さんの馬屋青青文化財
堀の白鳥静の極みに世相無し
城下出て蛙の声に親しみぬ
うしろ髪引く伊井さんの白鳥が
六根清浄噛まずのみ込む冷さうめん



清響集
豊田都峰
その五十二



春の逝く思ひに吉野門くぐる
花影に漱ぎて名妓に合掌す
新緑や光悦の書く山丸し
播州に発するよろづ風光らす
夏料理まづ風といふ一品を
涛音をまなうらにせん鑑真忌

白南風や崩れづくしを城址とす
城址灼け丘の畑として起伏
石垣を崩せど聖旗となびく青葉
夏潮へ原城址なほ崖立つる
雲仙灼け城址の石みな墓碑となる
原城址底よりも沸く青葉騒
母祈る限りは海の風薫る
天恋の遠まなざしをつつむ夕焼

秀華採集

ここまでは風ここからは花吹雪

金子 野 生

海道前師に指導を受けての優等生であるが、今回の作品はその指導理論に則したもので、いわゆる分析の方法を駆使した点で注目した。実相は眼で見て細かい所を決して見落とすことのない観察と分析を行うというわけである。

青麦や骨から延びる男の子

田 測 昌 子

露を煮ていつしか一人になる思ひ

竹 貫 示 虹

前句、季語の働きもたいへん効果的だが、分析の立場からも考察していると言える。後句の哀歎は誰のものでもあるが、「露を煮て」の日常性がひとしお共感を呼ぶ。

鈴鹿 仁

指 胼 胝

矢面に立つ鴉みて梅雨に入る
夏帽子上ル下ルを得手として
まくなぎや器用貧乏の指の胼胝
朝顔の蔓のゆきさき一人旅
蛍火の闇を動かす自尊心
岩清水ひかる一筋神のもの
襖絵を抜けて身軽さ夏雀

近 詠

宇都宮滴水

病 み 虫

それぞれの影よみがへる半夏生
千年の上枝ほっえめざせりかたつむり
物見蟻のぞかれてゐる腿のうら
ここに来てひまはりの風行き詰る
鳴くものを集めて遅し蛍川
西瓜割日屑散らばりゐる浜辺
恋ほたる名残の橋を引き返す

神麓集



行春や他人のやうなわが齡
その頃と思ひし空に桐の花
早合点して悔まれる小判草
諸子好き近江生れの父の酒
五月晴心の傷手癒えざるも

土用干 大塚 まや

土用干想ひ出と言ふ不用品
探鳥の記念にひとつ桜の実
真昼間の木瘤となりぬ青葉木菟
響きあふ一番星と夕顔と
地味色の鳥に好かれて八つ手の実

薔薇 柴田 朱美

核心をはづされてゐる薔薇の午後
奸計や聖書の中の薔薇の棘
耳鳴りは薔薇の崩れる音に似て
薔薇の棘使つてたくみに殺めたり
青い薔薇媚葉の量をあやまてり

東風心地よしと十石舟を御す
森抜けて蛙の声を踏みにけり
若楓山には山の掟あり
若楓一氣に開きまぶしさよ
車椅子用意整ひ若楓

荻野 千枝

沙羅咲けば沙羅の数だけ禪語降る
白内障眼のやうな暮春の姫路城
滅ぶもの何か咳く沼遅日
新樹光遺句の心音空耳に
柏餅になりてうたた寝してしまふ

松本 鷹根

葉桜や生駒金剛青うすれ
足もとの蟻を見てみて喰ひ零す
そよ風の川面映りに子鴨付く
大真鯉水六月の背鱗かな
滝なれば糸にもつれのなき白さ

神麓集



香炉扱る 森津 三郎
おぼる夜の猫と眼が合ふ不覚かも
耳遠の同窓会の四月来る
三十三義母の回忌を春惜しむ
窓のない救急室に春惜しむ
惜春や 栄本町 香炉扱る

白壁 丸井 巴水

しんにようの裾跳ねあがる鮎の宿
神よりも佛飯多し藤あかり
みどり風麒麟の角が感電す
国宝に寡黙な対峙梅雨冷えす
白壁の楽譜をたどる揚羽蝶

残暑 竹貫 示虹

文鳥の舌ひらひらと残暑なり
鳳仙花「家出のすすめ」立讀みす
あともどり出来ぬ履歴や走馬燈
ひぐらしや齡の順とはゆかぬらし
正法眼藏唐辛子の葉を煮る匂ひ

死生観 北川 孝子
淡海いま水のつぶやき蝶の恋
死生観いまあらたなり若楓
惜春の己が道行くわが歩み
春名残海へ胸襟ひらく風
つらつらと椿名残の内侍墓

倉敷 川崎 光一郎

薰風やぶらりと倉敷美観地区
影ゆらゆら倉敷川の夏柳
新樹光ヨハネの像の指す天地
グレコ画の「受胎告知」やマリヤ
美術館出でて眩しき蔦若葉

濁点 伊藤 希眸

庭石の間の濁りよつつじ咲く
白玉やとぎに友情濁りけり
黄濁の川つき当るさつき波
山の雷濁りだしたる水奔り
梅雨晴の路地の濁点にはたずみ



京鹿子集

豊田都峰選

青梅 金子 野生

埒をはみ出す防衛庁の櫻
芽吹き急いざ鎌倉の張りを継ぎ
池に出て別の明るさ花の昼
池の禽花の塵には目をくれず
ここまでは風ここからは花吹雪
この星は碧い球体黄砂ふる
少女消え椿は紅きしづく溜む
弱気では越えられぬ尾根つばくらめ
青麦や骨から延びる男の子
人あても人あなくても落花舞ふ
母の日の病院のドア立てば開く

高槻 田淵 昌子

城陽 竹貫 示虹

葉桜の高階に曳く点滴棒
うす粥の三匙に足りるフリージア
青麦を挿し枕頭の日を癒やす
露を煮ていつか一人になる思ひ
産土の記憶以前のさくら咲く
唱名の吸はれてゆきぬ夕桜
灘万の弁当に散る花一片
学園や日々に新たに樟若葉
緑陰のなか立ち上る火焰土器
涅槃図の虎の尻つ尾を踏まむかな
菜の花の妣へとつづき陽は西に

千葉 河内 桜人

伊藤 希眸